

## 序 文

## ルネサンスの実相

ルネサンスに対しては、おおまかに言って歴史観が二通りある。ブルクハルトによって提唱された、明るく花開くルネサンスという見方の近代史観がそのひとつである。ブルクハルトは一八六〇年『イタリア・ルネサンスの文化』という大著を出版して、この中でルネサンスを近代の出発点と見て肯定的に捉え、それ以前の中世を暗黒とみなした。この説はシモンズの『イタリアのルネサンス』（一八八八年）によってさらに強固に主張されるようになって、後世に甚大な影響を与えた。

もう一つの代表的な史観は中世史観と呼ばれるもので、一九二七年ハスキンスが『十二世紀ルネサンス』を刊行することで嚆矢となった。これはルネサンスを中世の単に最終段階と見て、中世盛期（十二、十三世紀）を十五、十六世紀のイタリア・ルネサンス期よりも優れているとし、ルネサンスの獨創性を否定する見解である。この史観に立つと、ルネサンスの華やかさはぼやけてしまっただけで薄曇りの状態となり、中世が暗黒でなく光り輝いて映し出される。

私自身はいずれの史観にも与しないが、どちらかという中世史観に近い。しかし一方でブルクハルトの大著の魅力には尽きぬものがあって、棄てがたい。

要するに大切なのは、ルネサンス期の実相をこの目で確かめることではあるまいか。特に見落とされがちな文献文化に注目して、豊かに培り出してみることである。それも哲学や思想といった体系的な分野からのみならず、人間の生の息遣いが脈打つ文芸作品の中からも掬い上げることである。さらにそれ以外のさまざまな知の領域にも目を向けるべきであろう。

一個人ではとうてい無理な作業だが、私は私なりに挑戦してみた。その成果が本研究である。ありのままに凝視すること。この一語に集約される。

そして時代の実相を最もよく写し取っているものとして説話に着目した。本論は三章仕立てで構成されているが、どの章にもその章の導き手として説話を取り上げて論じてある。説話はたいがいが作者未詳であり、穿った言い方をすれば、一般民衆やその時代の文化の意識・無意識の総和的な表現だと考えられる。特に無意識の面が頻度高く見え隠れしているのではあるまいか。そこを突破口として考察の域を広め、深めていきたい。

最初に断っておくが、本書で言うルネサンス期とは、だいたい十四世紀の中葉から十七世紀の前半までの約三百年を指している。具体的にはフィレンツェをペストが襲った一三四八年から、カンパネッラの『ガリレオの弁明』が上梓された一六二二年までである。

第I章では、人生身Vということ、中世末期の説話を介して考え、やがてルネサンスにおいてその文化の基調音となる生命主義を示唆したい。

第II章では、知のさまざまな形や広がりを目を配って、ルネサンス期の知や知的営為を私の能力の範囲内で提示する。

第III章では、ルネサンス文化の一大特色である魔術の知を、私の長年の研究対象であるカンパネッラに登場してもらって論述するつもりである。